

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
9月号

毎月23日発行
通巻385号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



シバグリ 井手 泉 写

大倭病院職員座談会

肉体のない心の世界 (中) ——法主様に聞く

平成2年11月 大倭会館にて

霊界と現界は一体のもの

法主 霊界と現界は不二一体、別のものとちがうんですよ。だから、柴地さんにもね、アコちゃん(柴地暁子さん)がいつべん会いたいとか言うけれども、自分である程度、精神統一すればできるはずや。時によったら姿が見えるやろし、夢でやったらものも言えるやろし。

霊の世界は、夢の世界に似てるわ。自分の意志どおりにはならへんや。ダイヤモンドがあつて、欲しいと思つたかてめつたに取られへんわな。たいてい、ええところでバアになるもんや。

柴地さんの場合は霊界でも楽に暮らしてるし、生きておつた時と同じ仕事をやってます。仏教で言う地獄、餓鬼、畜生とか三悪道の精神状態であれば、もう苦しみばかりで何にもできへんけど、霊界に入ったかて、字の稽古してる者も、彫刻を一生懸命やっておる者もあるわ。だから生きてる時が大事な。

看護婦さんは病人さんの介抱をするんやから、もう一番良い仕事やで。生きてる間は分からねん。こんなんめんどくさいなあとか、うるさい人やとか思うやろしね。けど死んだら分かるわ(笑)。

病院は女の職場のようなところやわな。女の人が多いし、女はやっぱり陰性なんやね。男は出す方だけど、引つ込む方や。そういう気がみんなあるから、どうしたかてヒスも出るし、イケズも出る(笑)。

けどね、本質的には、女の方がえらいんやで、生命体を宿すんやから。男は種だけや、出しっぱなしやもの。昔から日本の国は、女ならではの夜の明けぬ国と言うねん。武力制覇の時代になってから男の世界になつたけれども、古代社会は女の方がえらかつたんや。

あんた達のような、人の喜んでくれる仕事してきた人が霊界に入つたら、それが一つの功德として、自分に返ってくるねん。うちの福祉施設の方の寮母さんにも言うんですよ。自分で自分のことをできない人をお世話する仕事でしょ。うるさいとか嫌やかという気持を持つたらあかんで、て。それより健康で世話できる方が幸せなんだしね。

あんた達も宿命として、こんな仕事に携わっているんやから、まあ続く限りはやらはつたらええと思うわ。そしたら死んだ時、初めて分かる。霊界に行つたら、法主さんが言うてはつたん、ほんまやつたなつて礼に出てくるよ(笑)。そしたらまた話ができるけどね。

まあまあ、いろんな話を混ぜて、かいつまんで霊界についてお話ししておるんやけど、一番大事なことは、自分には定まつた宿命があるということ。これはもう信じることなんです。あんた達が、この道に入るには皆、自分の生まれた土地、家族、その時の世の中の動き、いろんな事情があるはずやからね。

あんた達の仕事は最高やで。それは芸術家や学者になるのも結構やし、きれいな仕事もたくさんあるけど、人の世話をするのが一番功德を積む仕事になるんや。肉体的、精神的に思うてる人が病院に来るんやから、職員さんは温かく扱ってもらうことが大事やと思うね。お医者さんなんかは、もう宗教の仕事やと私はいつも思ってます、人の生命を守るんやもの。

医者になるのでも何かの因縁でなつてはるんやわな。優秀な人しかならねへん。何度、試験を受けても落ちる、何とかならんかと相談されることあるんやけど、それは仕方ないわ。こんな知識の問題やし、もつと勉強しいと言うよりあらへん(笑)。天神さんに、なんぼ拜みに行つたからあかんわ。自分で切り開いていかんかつたらね。

大倭病院では、患者さんが精神的にも救済されると思うような、そんな病院になつてほしい、というのが私の希望やねん。

人格霊とも協力しあっている

最初に光明皇后さんが出てきた時に、人間が生まれてから死ぬまで幸せに暮らせるような一つの地域社会をつくるということを約束をしたんです。ゆりかごから墓場までという、そんな理想社会やわな。だから病院をつくるというのは、もう四十年来の念願やつたんです。人間は誰でも、どないしたかて病気になるでしょ。

学校も必要やと思つてます。じつと見てるけど、何でか学校はできへん。

病院の方ではできました。だからね、うちの病院は、神さんこわいよ。人格霊というのがおるんや。横着をかますような気でおつたらあかんで。

万物を生かしている宇宙の生命体が、大きな加美さんやね。人間として生まれて死んで肉体のなくなつた靈魂も、一応、神さんと言うてるけど、これは肉体が無いだけで我々と同じ人間やねん。それで人格霊と言つてます。犬や猫、狐や狸、蛇でもみんな靈魂があるんや。これは固有霊と名前をつけて区別してます。

だから、大倭で仕事をする場合、形のある生きてる我々と、形の持たない人格霊が協力して

やつてるんやな。その代わりこつちがややこしい気持で仕事してると、裏が出る。私は長年経験しているから、はつきり言えるの。心の良い人はね、罰が当たるのが早いわ。病気になるか怪我するか、それは知らんけどもね。心の悪い人は、最後にこわい。霊界の人も皮肉なことするんやで。

そんな意味の神さんや。この病院では、神さんが、あんた達の心の状態とか、みんな見てはる。日本で言う、カミさんは、「上」のことで、キリスト教の言う神さんとは全然違うんやね。役人さんもお上でカミさんやし、女の人もえらいからおカミさんや。先祖さんは先に生まれてはるから、氏上で、氏神さんやわな。神社に祭つてる神さんも人格霊が多い。我々より先に死んでるから神さんや。けど人格霊は、肉体がないだけで我々と同じ人間やねん。拝む対象とはちがいますねん。神社のお社なんか荘厳にしてあるから、みんな建物に頭を下げるんやな。

私は神社に拝みに行くんじやなしに、遊びに行くねん。神社は、そこに居る霊体のお住まいの場所、一つの家庭と一緒にやねん。

神社にはそういう気持でいつも行くんやけど、私の場合、いろんな妙なことがあんなねん。伊勢神宮に参つた時、参つたというのは言葉の綾やな、遊びに行つた時ね、挨拶にパンパンと手をたたいて「こんにちは、遊びにきました」と言うんや。そしたら前に下がつてる白い幕がね、スーッと上がつてしまふんやで。相手にそんな感応があるんやね。「ああ、よく来てくれました」つて喜んでくれてはるんやわな。

熱田神宮に行つた時もそうでした。戦争前の官幣大社やもの、不敬なことないように両側にこわい人が立つてる。私が参つた時、幕がピューッと上がつてしまふんやな。そうしたら立つている人

が来てね、「どなたですか。お名前を聞かせて下さい。長年、ここで立っているけれども、幕の上がる人は殆どありません」と言うんや。私は学生で十代の頃や、「名前を言うほどの者ではありません」と言うてんけどな。熱田神宮の神さんは、草薙の剣がご神体になつてるんやけど、そこにやっぱり人格霊がついている。その人が喜んでくれるんやな。

この前、文化行事で諏訪大社にみんなと行った時なんかね。宮司さんがお祓いして、私が代表で玉串をあげに行つたところが、お社の中に、神さんも仏さんも何もあらへん。立派な社殿やけど、空っぽやなと思つた。内心でね。そんなこと宮司さんには言わへんよ。終わつて下りてきたら、体が勝手にキュッと曲がつて足が動くねん。あれあれと思つていると、ごつごつ古木のところに連れていかれたの。そこにまた、大きな四本柱というのが立っているわけや(※諏訪大社には、奥山で伐り出した大木を大勢で曳行する御柱祭という行事があることで知られる)。そこに人格霊がおりましたわ。それで「こんにちは」と挨拶してきたんやけどな。

現界と霊界は、密接な関係があるんやわな。今日まで私はうるさいほど体験してきてます。

うちの病院には、そういうような神さんがたくさんおるから、おどかすんやないけど、まあ真面目にやらんかったら、こわいよと言うねん。

平和のための鎮魂慰霊

またどこの医者や病院に行つたかて治らないというふうな患者さんの中には、いわゆる霊障害の場合があるんやね。一つの肉体に別の霊魂がくっついて病気を起こさす霊的な障害。そんな相談が

今まで私のところに、ずいぶん来ています。最近も東京の八王子から電話で相談があつて、脳波もどこも異常なのに苦しいと言うんやね。見たら、首に邪霊がついている。だから、はずしておいてやったの。後で聞くと、それで治つたみたいや。そんなこともあつてみたりするしな。

医者でも全然分からんという時があるんやな。先生を側において言うのもおかしいけど(笑)。医療である程度治つてきたら、そこは別のところが悪くなる。あつちこつち移るということもあるよ。霊的障害から来ている場合には、私が見ていたらね、大体、首筋や腰の神経が集まっているところ、女なら子宮、その辺りに付いていることが多いわ。そこでその病気を治療したら下半身が悪くなつてみたり、脊髄の中で上がった下がったりして、ほうぼうに障害が起こるんやな。

土地にくっついていっている霊魂もある。心霊研究をやつてる人達なんか、地縛霊という名前を付けてるわ。その土地と離れないような霊魂があるんやね。それを知らないで家でもたてるでしょ、そうすると入れ替わり立ち替わり病気が出てくる。

だから病気というのは、医療以外に心霊的な角度から見ないといけない場合もあるんです。

それで昔の人は、屋敷をつくる時には必ず地鎮祭をしてお祓いしたもんや。今でも地鎮祭やるけれども、ただもう形式だけであれば何にもならんねん。うちの大倭殖産でやる場合は私が頼まれるから、もし邪霊がおれば祓いのけることできるし、高度な、上位の霊であればお社に鎮めてお祀りしてあげることが出来ます。ほんまは、そういうことをするのが地鎮祭やねんけど、カッコウだけという場合が多いわ。

大分、昔の話やけど、奈良の西大寺近くの料理屋さんだったか、その部屋に入ると病気になるた

り変になるんやと云うて相談があつたの。行つてやつたら、死んだ女の人の霊魂がくっついてるんで清めてあげた、というふうなこともあつたわ。世の中というのは、霊界のことをある程度知っておかないとね、我々の生活に直接関係ある場合もあるから。邪霊でなく、善良な霊魂ばかりだったら、人間の世界も穏やかにいくんやけど。死んでから悪魔みたいになつてる霊魂はたくさんあるんです。

そういう霊魂を鎮めてあげる、慰霊していくのが私の仕事なんです。文化行事に出て行くのも、私の場合、それが目的です。

これは何とかせんなんと、一番思つたのはね、崇徳院(※保元の乱を起こして敗れた上皇。讃岐に配流され、そのまま亡くなった)でした。だから四国の白峯陵に、もう五、六回行ってます。だんだん穏やかになつてはるけどな。

霊の世界で荒れていると、現界の方も争いとか起こつてくるんやね。あんた達でもそうでしょ。精神的に悩みや苦痛があつたら、肉体の方も具合が悪くなるわね。現在、世界がまだまだ平和にならへんということは、過去にもう戦争戦争で死んだ人がたくさん居るし、鎮魂してないんやね。霊界の人達が安定しなければ現界の社会が安定しないんです。そういう意味で宗教が必要になつてくるんやな。

だけれども、日本の宗教は企業をしとるんやもの、はつきり言うたら金儲けばかり考えているんや。だからね、世の中はまだまだ平和にならんや。どれだけ理想があつて学問があつて立派な人であつてもね、戦争で死んだような人の霊がつかつたら、争いを起こしたくなつてくるんやな。知恵を持つてれば持つてたで、その知恵を利用した悪いことしよるし。(続く)

風ぐるま

熊襲の穴

博多にて 矢部 顕

激動の4世紀末、大和王朝・景行天皇の皇子ヤマトタケルの遠征物語は『古事記』のなかでもっともすぐれた文学的英雄叙事物語といわれる。この物語は熊襲征服の西征物語と東国の蝦夷征服の東征物語でできている。

東征からの帰路、ヤマトタケルは伊吹山で、退治に向かった荒ぶる神の妖気に当てられ惑わされてしまい、必死の思いで逃げ下り、病気になる。大和を目前にして三重県亀山の能煩野で亡くなる。最期に故郷を偲んでうたった歌がことのほか有名である。

「倭は国のまほろば たたなずく青垣 山隠れ 倭は美し」

ここに御陵がつくられた。長径90mの前方後円墳で王塚と呼ばれている。

学生時代、ときどき運転手を頼まれて、法主さんのお供をしたことがあった。ある日、行き先は覚えてないが、帰り道にここに立ち寄りお参りした記憶がある。いや、近くの別の比定地だったかもしれない。

「花は霧島 煙草は国分 燃えてあがるは オハラハアー桜島」(鹿児島オハラ節)

霧島連山はミヤマキリシマの花が5月下旬全山を彩る。霧島火山の噴火でできたシラス台地は稲作には適してないのだろう。以前は煙草の大産地だった国分は、律令政府の国府が置かれ国分寺跡もあるところ。日向国から分かれて大隈国が設置

されたのが713年で、このころ国府が置かれたという。国分市の隣町は隼人町。

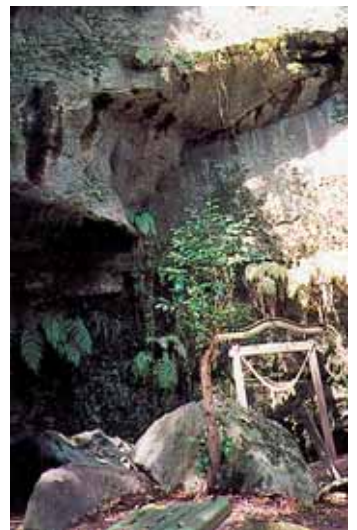
霊峰霧島山中の水をあつめ錦江湾にそそぎ、その名も天孫降臨から由来する天降川に沿って、隼人町から霧島山に遡る溪谷には、いたるところに温泉が湧き出でている。

天降川の中流に位置する妙見温泉のはずれ、霧島にむかう道路を少し歩くと「熊襲の穴」と書かれた大きな看板が目にはいる。ここから山道に入りむむした石段を15分ほど登ると、注連縄がつるされた簡素な鳥居がむかえてくれて「熊襲の穴」に到着する(＝写真)。

立派な照明用の電源スイッチボックスがあり訪れた人は自ら操作し、洞窟のなかに入ることができる。洞窟の入り口は背をかかめて入らなければならないが、中は思ったより広く高さもある。約100畳敷きということだ。もっと奥にはこの3倍もの広さの洞窟が広がっているとのことだが、その通路は岩が崩れ落ちていて今は入ることはできない。

ここ大隈地方は、このような洞窟があちこちにあるらしい。他のある洞窟で「ウルトラマン」の映画の撮影をしているという新聞記事を見たことがある。また、浄土真宗禁制を300年も続けた薩摩藩で、門徒たちが密かに集ったり、法座を開いたり、仏具を隠したのも、「隠れ念仏洞」と呼ばれる霧島山麓一帯のたくさんの洞窟だった。

この地方はクマソともハヤトともいわれる先住民族が暮らしていた土地である。クマソとハヤトは別の民族という説もあるが、ほぼ同じ人々で時代によって名称がちがってきたという説もある。



国府が置かれていたころはハヤトと呼ばれ、以前はクマソと呼ばれていたとか。

大和王朝に服従しない民としてのクマソを征伐するために、景行天皇は16歳の皇子・小碓命(オウスノミコト)を派遣する。いわゆるヤマトタケルの西征物語のはじまりである。

ここでクマソの首領・川上梟帥(カワカミノタケル)が宴会を開いていたとき、小碓命が女装してもぐりこみ、酔っぱらったカワカミノタケルを隠し持っていた剣で殺したという伝承の場所である。カワカミノタケルは小碓命の勇猛を称え「ヤマトタケル(倭建)」の名を贈った。以来、小碓命は「ヤマトタケル(倭建命)日本武尊」と呼ばれるようになったと『古事記』に書かれている。

穴のなかに照明つきの解説板があり、カワカミノタケルを称える文章が記されていた。地元の人々のクマソの首領への思いがうかがわれる。

驚いたことに天井や横壁部分に原色のペイントで、渦巻きをベースにへびの形、星、月などの抽象画が描かれていた。10年ほど前に鹿児島出身の前衛画家が絵画パフォーマンスで周囲の反対をおしきってやつたらしい。絵の文様は隼人町の民俗資料館でみたハヤトの旗のデザインに通じるもの

大倭会主催 第14回文化講演会

日時 平成14年11月10日(日)
午後2時より
場所 大倭紫陽花邑 拝殿

今回、講師となつて下さる鶴見俊輔氏(哲学者)は、1922年東京に生まれ、15歳で渡米、ハーバード大学でプラグマティズムを学ばれました。在学中に、アナーキスト容疑で逮捕され、留置場でトイレットペーパーに論文を書き卒業されたというエピソードの持ち主です。

が感じられた。ハヤトの末裔の画家かどうか知らないが、カワカミノタケルの最期の場所に、鎮魂のために描いたのかもかもしれないと勝手な想像をした。

ハヤトのなかでも大隈ハヤトと呼ばれる人々は国分市、隼人町を中心としていた。クマソ征伐から約3世紀後の養老3年(720年)、律令国家の支配を強めようと体制整備がすすむなかで大規模なハヤトの反乱があり、その制圧に1年半を要したといわれる。征隼人持節大將軍は万葉歌人でも眺めることのできるデコボコした小山、城山と姫城がハヤト最期の砦であったと伝えられている。先住民族のこの地は大和中央政府にとつては常に辺境のまつるわぬ民の住む地であった。

その昔、ハヤトの血が濃いと思われる神武が東征によって樹立した大和政権が、のちのちハヤトを弾圧する立場になるとは……。古代史のなかでのハヤトの運命に想いを巡らせる一日であった。

登美谷の名残

第9回

「富雄(村)」の歴史について

矢追隆義

『日本書紀』の神武紀、戊午年十二月の条、神武天皇と長髓彦(登美彦)との合戦に、金鷄禰禰の話が出てくる。「長髓は是れ邑の本の号なり。因りて亦以て人の名と為す。皇軍の鷄禰禰を得るに及びて、時の人仍りて鷄邑と号く」とあり、長髓邑が、金鷄の瑞祥により鷄邑と言われるようになった。それが『日本書紀』のできた奈良朝時代ともなると、「トミ」と訛り、「鳥見」と書かれるようになる。

六四六年、大化の改新により我が国の国家組織が一応でき上がり、鳥見邑の地は、大和添郡となり、間もなく添下郡ができ、この行政区画に属することになる。

和銅七(七一四)年、早くも正史に添下郡鳥見郷の名称が出てくる。十世紀頃になると、鳥見邑が鳥見庄となり、領主として大和の支配者である興福寺が司ることになるが、地形がややこしいため、上鳥見庄・中鳥見庄・下鳥見庄の三つに分けられ、上鳥見庄には北倭村・上村・二名・鹿畑、中鳥見庄には三碓、下鳥見庄には中村・大和田・石木・城村、等が属することになる。鳥見庄の名称は最初、延久三(一〇七一)年、『興福寺雑役免帳』に出てくる。やがて時代の流れと共に支配者階級も武家へと移り、彼等は村落を単位として人と土地を握ることになる。

下つて文禄四(一五九五)年に太閤検地で「村高」が決定された。それによって行政村落として発足したのは、二名・三碓・中村・小和田の四村

であり、その時の領主は郡山城の増田右衛門尉長盛であった。ところが関ヶ原合戦後、豊臣が滅び徳川が天下を取るに及び、郡山城は徳川幕府の直轄となり長盛の旧領は天領となる。従つて鳥見の村々も天領となり、やがて奈良奉行が設置されて、二名・三碓・中・藤之木・小和田・大向・木嶋・石堂の八ヶ村が行政村落となる。

明治六年に発令された地租改正により、明治九年を以つて石堂村・木嶋村が合併して石木村となり、大向村と小和田村が合併して大和田村となる。さらに明治二十二年になつて、二名・三碓・中・石木・大和田の五ヶ村が合併し、自治体「富雄村」が初めて発足することになったのである。

上代の鷄邑から始まつて、登美、迹見、鳥見等の地名漢字が残っているが、二名、三碓、中、石木へと、流れ続けてきた由緒ある「富の小川」から選ぶのが一番ふさわしいとのことで、その名称が生まれたと聞いている。

いかるがや 富の小川の 流れこそ 絶えぬみいづの 始めなりけり (僧正良聖)

余談として

大正三年、大阪・奈良間を結ぶ大阪電気軌道株式会社(通称大軌電車)が当地を通ることになり、駅名が「富雄」と名付けられた。昭和十五年、紀元二千六百年奉祝記念事業として、国が神武天皇聖跡の顕彰を行い、『日本書紀』に出てくる「鷄邑」は「凡そ北倭村及び富雄村に亘る地方と認める」旨の発表があつた。これに呼応して富雄駅も「鷄邑駅」と改名されたのだが、今度は敗戦により再び「富雄駅」に逆戻りするといふ歴史を持つ。尚、神武天皇聖跡の顕彰についての詳細は、昭和十四年二月発行、著作者・矢追隆家(日聖)氏の『金鷄の黎明』を参照されたい。

平成13年11月11日 大倭会文化講演会 於：大倭大本宮拝殿

アニミズムの世界 — 沖繩・龍神・・・ (6)

— 故山尾三省さんを偲びつつ —

講師 野本三吉氏

何を拝んできたのか

具志頭新城(グシチャンアラグスク)という村がありまして、この村長さんの息子さんが東京にいて大学もちゃんと出ておられたんですけど、精神病になって帰ってくるんですけど、下半身をみんな脱いでしまう。家の門の前でお尻を向けてみんなに見せて、腰を振ったりして歩くんです。もう、恥ずかしくてしようがないと、引き入れるんだけど、ワーツとあばれてまた外に出る。

そこに、比嘉ハツさん一行が行くわけです。ぼくもその時一緒にした。どうしたらいいだろうと、相談を受けました。

あばれるのがおさまると、部屋の中に入ってしまったて全然出てこない、もう何もしゃべらないという状況だったんです。

その村の関係者で、伊佐トミさんという方がいらつしやいました。この方が突然、神がかりになつてしまつて、その時一緒に参加されていたんです。その村長さんの家の近くに、多くの方が亡くなつた所が在るといふので、入りましたら二つこの洞窟がありました。地元の方は、そこを父の洞窟、母の洞窟と呼んでいました。

父の洞窟のずつと奥に行きましたら、上から、何千年、何万年かけてできた、みごとに男根が下がっていました。一人ではとても抱えきれない、

屋久島の杉みたいなものです。血管まで浮き出ている。男の連中は「アーツ」と言つて抱きつくんですよ、みんな。もう何というか、あけつびろげです。女の人は「よろこび、よろこび」とみんな踊りはじめる。ぼくにも「いつか、子供が生まれるよ」と言つてくれるんです。あれから三人生まれましたけれど(笑)。これはもう、何万年もかけて創られたすばらしいものでした。こんな大事なものがあつたのに、入口が本当にひどい状態です。

そして、そのすぐ近くに、母の洞窟がありました。ここは、女性の性器が本当に見事に現れていました。きれいな泉が湧いているように水が垂れてくる。それがとつてもきれいです。落ち着いてしまふんです。

部屋に戻つて、夜の審神をとつて皆で話をしている時に、ぼくはものすごく喉の奥がむずがゆくなって、何かを叫びたくなるんです。どうしようと思つた時、伊佐トミさんという巫女さんが踊る。その踊りが手を前に突き出してすごい勢いなんです、パーツと。その瞬間、全身あげて、「アーツ」と叫ぶんですよ。僕も一瞬遅れて「アーツ」という。奥の部屋から誰かが「アーツ」と叫ぶ。村長の息子さんがふとんの上で「アーツ」と叫んでいる。

ハツさんが、腹を抱えて笑うんですよ、ケラケラと。「やつと出たね。言葉の一番初めのアが出た。さあ、これからで結ぶのは誰かね」と言う。「アとんで結ぶんだよ。三吉さんは、日本へ行つて、んで結ぶんだよ」

この息子さんと伊佐トミさんは寅年なんです。ハツさんが「はい、見てごらん。審神が出ていたよ」。その家の床の間に大きな掛け軸をかけてあつて、寅が吼えている絵が描いてある。「お父さ

ん、この掛け軸はいつ掛けましたか」とハツさんが聞く。「今年の正月に、どういうわけかこれが掛けたくてしようがなくなつて掛けました」「ちやんと出ていたね。審神が出ていたね」

そして、この息子さんは落ち着くんです。普通の生活を始められるんです。

こんなことが、いっぱいありました。ハツさんが、洞窟の中で話されたことをいくつか伝えておきたいと思ひます。今日のことともみんな、つながってくるんです。

神様、仏様と、皆さんは今まで何を拝んできたのですか。神棚や、ろうそくたてに向かつて手を合わせてきたでしょうが、あそこに、神様がいますかね。そうではないでしょう。海、山、川、天、地、火、そのものが神様とちがいますか。そこに手を合わせるのが本当とちがいますかね。海が神様なら、なんであそこに、ちり捨て、ごみ捨てできますか。山が神様なら、なんで感謝の気持ちなく、平気で木が切れますか。山が崩れますか。そういうこと、一向にかまわず、海や川は汚し放題、天に感謝の気持ちもなくして、ただ自分勝手に神棚を拝んでいるのでは、これはおかしいのとちがいますか。神様は探しても、どこにも見つからないですよ。今、生活している中に神様がいます。自分が生きている足元の地面がなかつたら生きていかれんでしょうが。そしたら地面が神様ですよ。空気を吸つてこそ人は生きています。生きている。そしたら空気が神様でしょうが。生きていく元となるものすべてが神様。自分を生み育ててくれるものすべてが神様。そうではありませんか。

村の人たちに、こういうことを言われます。とつてもよく分かるんですね。(続く)

寸 莎

第52回

沖繩ミロク会の人達

お互いの懐かしさ

今回の「寸莎」では、特別篇として、ごく最近に大倭を訪れた沖繩のグループのことを紹介したい。

そのグループとは、本紙に連載中の、野本三吉さんによる大倭会文化講演会の講演記録の記事の中で、「昔ながらの岩戸開きをしている、古神道のなごりをもっているグループ」として生き生きと語られている「沖繩ミロク会」のことである。

このグループの創始者の比嘉八ツさんは、平成九年にすでに帰幽されているのだが、戦時中は広島に住んでいて原爆の投下を一日前に夢で予見するような霊能者でもあった。戦後は沖繩に戻って、各地に点在する自然の洞窟で悲惨な沖繩戦の犠牲になつた方がたの遺骨の供養をしてまわる慰霊の活動をはじめた。

八ツさんの霊能力を慕つて集まっ



8月24日の夜、大倭での皆さん
前列、一番右側に座っているのが比嘉良丸さん

てきた人達の中には霊的感応にすぐれた女性（巫女さん）も多く、八ツさんと共に戦のない世を希い、母なる自然への感謝の祈りを鍾乳洞のような洞窟の中で捧げる「岩戸開き」の行を精力的に続けたという。

野本さんが語ってくれた比嘉八ツさんの言葉を少しだけ引用してみよう。——「今、世の中たいへんな時ですよ。自分一人の損得ばかり考えておつたら、地球が減んでしまうかどうかの瀬戸際ですよ。……天地一切、河川草木、全ての自然の恵みを受け、それを利用していただいているのに、人間はその恩を忘れて、使い捨て、踏みにじつているんですよ。地球母神は我慢に我慢を重ねて

おられるけれど、もう限界です……」この八ツさんが帰幽された後を引き継いだご子息の比嘉良丸さんと巫女さん達など九人の方がたが、今回、弥栄踊りの日の八月二十四日から二十六日にかけて大倭に滞在されたのである。

良丸さん達の当初の目的は、今秋に吉野の大滝ダムの底に沈むはずの丹生川上神社上社の旧地で執り行われる水没鎮魂祭に参加すること、洞川の大峰蛇之倉七尾山にある洞窟で「岩戸開き」をすることだった。

ただし、沖繩以外に出て活動するのは今回が初めてとのことで、昨年の野本さんの講演のご縁もあり、本土に慣れない一行のために大倭で泊まっていたとき、有志何人かで空港への送迎をしたり、吉野にも四台の車で同行することになった。

グループ全員での本土行きは突然の神意によるものとのことで、飛行機も二便に分乗して来られた。先着の六人を、まず大倭神宮に案内したところ、何人もの方が強く感応され、「ただならぬところへ来た」と思われたようで、「翌朝、全員できちんと参拝したい」と申し出られた。

翌早朝、神宮にご一緒させてもらったところ、全員が地面に跪き、良丸さんご自分の体の中から自然に湧いてくるという、すばらしい口語

体の祝詞をあげられた。巫女さん達それぞれが、全身で感動を表現されているのが印象的だった。

この日に吉野へ行って目を見張るような洞窟に参つたり、水没鎮魂祭に参加したり、奈良市内の温泉に入つて深夜に帰邑したり、教務本庁で邑人達と語り合つたり、双葉館での食事の席でふと話してくれたりした中での、さまざま興味深いエピソードは、残念ながらスペースがなくて書ききれない。

ただ、そうした中で感じとつた彼等の姿勢——「自然の摂理や神意に心から従う」「ご利益を求めない」「自分達の信仰を広げたり、信者を集めたりしない」——に深い共感と親しみを感じたのは事実である。「はじめに会つたような気がしない懐かしさ……」というのが、期せずして双方の側から出た感想だった。

沖繩ミロク会の方がたにとつても、大倭訪問は「予期しなかつた大きな出会い」だったようだが、今回のいきさつをふり返ってみても、まさに「無計画の計画」が働いていたと思わざるをえない。（岸田哲記）※皆さんのお名前を順不同であげておこう。——比嘉良丸、塩浜康真、小橋川明、当真明子、大城照子、塚山和子、塩浜信子、金城たみえ、運天サダコ

あじさい日誌

8月11日 大倭墓地清掃、引き続き邑内の大掃除祓ぎが行われました。猛暑の中!:

大倭病院の裏庭に、タヌキが出現! 悠然と歩く姿に人間の方が圧倒されたとか。

8月12日 70歳になった昇ちゃん(老春手帳)ももらいました。「みんなと一緒」と喜んでいました。老いを自覚か?!

8月13日 昔のオープンリールの録音テープで残されている法主様の法話があります。今はそれを聞くための機械に困っています。また、齋藤正宏さんがインターネットオークションで探して、落札できました。テープの

保存状態も問題だそうですが、とりあえず期待しています。
8月14日 キャンパーOBの湯浅進さん、福田三郎・典子夫妻が、故平山久さんの墓参り来邑。矢部顕(博多からの荷物を持ったまま奈良の自宅へ戻る途中で)・今村忠生さんらも来て交流の家ホールで歓談しました。
8月15日 大倭神宮において立教開宣祭。終戦の日と密接不可分のこの日ですが、戦後もすでに57年が経ちました。これから大倭の教えはどのように伝えられていくのでしょうか。
8月18日 弥栄おどりの用がやぐらが組み立てられました。
8月23日 東光大祭・祖霊祭が執り行われました。
また祭典後は大倭会館でこの2、3年恒例になった直会が行われ、水野勝美さんの音頭で

大倭会第272回文化行事 秋の一泊旅行ご案内 富士山麓に日蓮を訪ねる

日時 10月27日(日)~28日(月)

行き先 身延山

ルート

(1日目) 奈良... 下部温泉郷
下部ホテル泊 TEL0556-36-0311

(2日目) ホテル... 身延山久遠寺...
近辺観光... 奈良

※遠隔地であり、関東方面の方もあるので

A. 往復奈良から全行程バスで参加

B. 宿泊ホテルに直接集合して2日目は

団体行動

の2コースで参加募集します。

費用 お一人3万5千円(コースAの場合)

申込み 10月5日までに世話人まで

皆さん、お誘い合せの上、ご参加下さい。

10月13日(日)の祓会で勉強会を行います。

問合せ 世話人 湯浅芳郎

TEL0742-48-3389

この日、沖縄の巫女さんたち9人が来邑され大倭会館に2泊されました。(詳しくは7頁「寸沙」をお読み下さい)
9月6日 大倭神宮月次祭。雨のため社務所での祭典となりました。
この日は、矢追妙月かあさんのご命日でした。
夜、大倭会館で邑倭の会が開かれ、各事業所間の情報交換が行われました。
9月8日 祓会。『おおやまと』8月号の「肉体のない心の世界」



弥栄おどり前夜祭として和氣藪々と踊りました。
祭り前後、会館や交流の家に1~3泊された遠方の皆さんも多く、語り明かしたそうです。
8月24日 弥栄おどりが行われました。終了間際にザーッと雨が降り始めましたが、みんな最後まで踊り納めていました。

この記事や表紙写真の「肉眼見虚像 心眼観実像」をテーマに真剣な話し合いとなりました。
大倭安宿苑では
8月21~22日 来年度採用予定者の第一次採用試験を実施、36名が受験しました。
(菅原園)
8月25日 帰省した住苑者も戻り、残暑きびしいこの日、かき水大会を屋台形式で実施、涼しさ美味しさを楽しみました。
(須加宮寮)
8月20日 屋上で夕べの集い。
焼肉やおにぎりを頂きながらカラオケを楽しみました。
(長曾根寮)
8月15日 2階フロアで定例懇談会。今回も食事の話が中心で、一番重要な部分と改めて感じました。
8月24日 弥栄おどりに、家族と共に参加された住苑者は、屋台で祭り気分を味わっています。

バザー月寄贈品のお願い

大倭安宿苑文化祭11月2日(土)・3日(祝)にむけてご協力をお願いします。

お問合せ 大倭安宿苑事務局
TEL 0742-48-3221

〈田んぼ通信〉

10月13日(日) 午前9時30分

実りの秋が近づいて来ましたが、今秋も、どうぞふるってご参加下さい。
〈服装〉長袖・長ズボン・長靴。帽子とタオルは各自ご用意下さい。軍手と鎌は用意してあります。
〈昼食・飲み物〉ご用意します。(差し入れ歓迎)

連絡先 Tel 0742-414615(双葉館)

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
10月6日(日) 大倭神宮にて午後2時より。
* 大倭会主催第四〇七回祓会
10月13日(日) 大倭大本宮拝殿にて午後2時より。(11月の祓会は文化講演会となります)
* 月次祭(大倭神宮)
10月15日(火) 大倭神宮にて午後2時より。
* 月次祭(大倭大本宮)
10月23日(水) 大倭大本宮拝殿にて午後2時より。